

画像診断の書籍は大きく3つに分類される。①疾患ごとの章立てがなされ、疾患に関して典型的な画像所見が掲載され、その上で、その疾患の詳細な説明などの記載があるもの。②症状や症候別に章立てされて、画像が並び、その中からクイズのように読者に考えてもらい、その後の頁で正解や解説が加えられているもの。③画像所見の変化を中心に章立てされ、その鑑別から疾患を考えるように組み立てられているもの、である。

①の書籍が圧倒的に大多数を占めており、疾患を深く勉強するのに適している。画像診断をしながら参考書のように広げ、知識を深めることができる。誰しも、この系統の書籍を1冊は所有しているのではないかと考えられる。放射線科医であれば、同じ領域の書籍を数冊所有していることも多い。画像診断に関する雑誌の特集なども、通常はこのパターンが多い。いわゆる正統派の画像診断の書籍といえる。

救急領域においては、臨床医は患者の主訴を含めた問診内容、身体所見から鑑別を考えて、その一環として画像検査を行っている。その意味では、②のような症状や症候別になっていると、自分の診療中の患者に当てはめて考えやすい。救急領域の画像検査において、近年増えてきた書籍のパターンである。救急患者であればこそ当てはまるものであり、救急外来に搬送されるような訴えがない疾患は、このパターンの書籍には含まれない。例えば、腎細胞癌が腹痛患者に偶発的に発見されることがあるが、このような書籍では腎細胞癌の組織型や、造影効果などについて全く触れられていない。

そして最後のパターンが、本書といえる。②と非常に近い関係にあるが、画像所見から鑑別を考え、そこから疾患名を考えることになる。すなわち、本来の医療では臨床所見などにより最終診断がなされるが、“純粹に画像所見から鑑別を考える際に役立つ”書籍であるといえる。救急医療の現場で従事し、その場に画像診断の専門家がいらないような環境の医師も多いのが現状(特に夜間・休日)であり、そのような医師を含めて画像の力を最大限利用して、速やかに正確な画像診断へと、本書が読者にとって役に立つことを願う。最後に、日常業務で多忙の中、執筆いただいた先生方に厚く御礼を申し上げる。

2019年7月

済生会横浜市東部病院救命救急センター

船曳 知弘